



National Institute of Technology, Hiroshima College Library

図書館だより 第56号

2023年（令和5年）3月31日
独立行政法人国立高等専門学校機構
広島商船高等専門学校



広島丸（撮影：海事システム工学専攻 宮前俊彦）

目次

巻頭言

本は本当に過去のモノか？…………… 図書館長 風呂本武典 (2)

寄稿<教職員>

昔ばなし…………… 電子制御工学科 吉田 哲哉 (3)

効果的なヒューマンエラー対策… 商船学科 片倉 広暁 (4)

欠けていることは何も悪くない… 一般教科 後藤田 和 (5)

物理学を学んだ理工学系学生に勧める一冊
…………… 電子制御工学科 西原 正継 (6)

第23回 校内作文・表現コンクール入賞作品・投票結果

…………… (7～11)

最優秀賞

『余命10年』を読んで…………… 南波 夏海

優秀賞

『行書がうまくなる本』を読んで…………… 上田 奏榮

『星の王子さま』を読んで…………… 近藤 瑚々

『試着室で思い出したら、本気の恋だと思う』を読んで

…………… 下川 千歩

『コーヒーが冷めないうちに』を読んで…………… 古坂 優衣

編集後記…………… (12)



本は本当に過去のモノか？

図書館長 風呂本 武 典

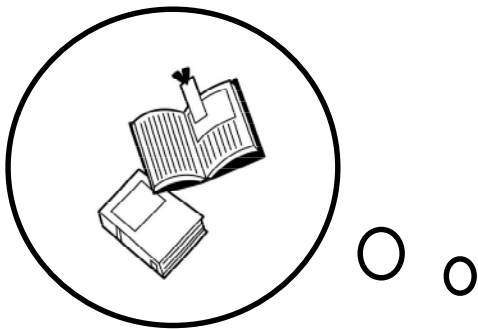
ネットにこんな小話がある。ある自称大学生「真実はネットにある。本なんか不要だ。今時本なんか読む奴は情弱の時代遅れだ。」それに対して「不勉強を棚に上げてバカ丸出しだぞ」という意見や「そういうことをいう奴が老害ネットで十分」という意見が喧々諤々。これがいわゆる釣り（わざと炎上させる書き込みで多くの反応を引き出し、話題作りをする）だったのか本当に何も考えずに軽口をたたいただけなのかは定かではないが、今時の若者？の考え方の一つだなあとも思ったものである。

さて、この最初の書き込みには大きな問題点がある。「真実はネットにある」、ということは何時どのように証明されたのであろうか。ご承知のようにネットにはフェイクニュースや単なる思い付きの噂話レベルまで沢山の嘘が溢れている。最近ではAIを使った嘘画像や嘘ニュースまで流す愉快犯がいて人々が騙されるのを愉んでいるのだからタチが悪い。どちらかというど注意しないと簡単に引っ掛かってしまうニセ情報が大量に出回っているから「真実をネットから見つけ出すのは難しい」のではないだろうか。ではネットに真実はないのかといえばそうではない。出どころがしっかりしているもの、つまり刊行された信頼に足る内容の本や雑誌、公的機関や責任ある立場の人物や組織が記述し発信したもの、またそれを正確に引用したものなどである。これらはその多くが過去に書籍として発行されている。それは長年にわたる人類の英知の蓄積である。つまり「ネットにある真実」なるものはその多くが本から得られた知見を基にしているのである。なるほどそのような知見を手軽にネットで見聞できる時代であるから、そのことを指してネットで十分という意味で言っているのだらうとすればまあ好意的に解

釈することはできよう。

ただしネットに書かれていることは多くが二次情報である。誰かが本なり資料なりを読んでそのエッセンスを抽出したものである。原典を当たらなければ裏付けがとれない情報も多い。そのプロセスを軽んじている者が果たして「情弱」といえるのだろうか。ネットを利用する際には玉石混交の情報から真実を抜き出す目利きの才を磨く必要があろう。それは本に触れること本を読みこむ力ではないだろうか。体系的に書かれた書物を読み解く力があればネット上散らかる断片の情報に吟味することができよう。それが無ければいつまでもネット情報に踊らされる、ネットこそ真実などとうそぶいている、それこそ「情弱」ではないだろうか。

それなら電子書籍なら良い？良いと思う。これからは恐らく様々な紙の書物が電子化されていくであろう。本は重たいし嵩張る。ネットで本を読む時代が早晚来るであろうことは予見できる。しかし全ての書物が電子化されることは無いであろう。過去の刊行された書籍全部を電子化するには膨大な手間暇が掛かる。それを行うには結局コスト面でペイするものだけが対象になろう。また電子データはその保存性において紙よりも脆弱と言われている。30年も経てば媒体が劣化して再生不能、あるいは再生機器が生産停止で再生不能（レーザーディスク、MD、ベータ、VHS…）などということが既に起きている。配信サービスの停止もあるだろう（これも実際に起きている）。未来永劫とまでは言わないが保存性においては昨今の電子媒体より紙の書籍の方が安価で丈夫なのである。今は過渡期かもしれないが、まだまだ本というものはしっかり現役なのである。



昔ばなし

電子制御工学科 吉田哲哉

私も皆さんと同じように高専に入学した高専生です。私は、鳥羽商船高専の9期生で、機関学科の卒業生、これでも海技免状取得者です。私が鳥羽商船に入学した当時、2年生が一人ずつ1年生の面倒を見る学友制度という寮生のきまりがありました。2年生の上にも3年生、4年生、5年生とつながり家族制度のようなものでした。私が学友さんに連れられ、3年生と4年生の先輩の部屋に挨拶に行った時、2人ともとても厳つい顔していたことと、机の上の本棚に数十冊の文庫本があったことに驚きました。夏休みの宿題の読書感想文を書くためだけにしか本を読むことがなかった私は、自分が恥づかしくなりました。そしてこのことが、本を読み始めるきっかけになりました。

まず初めに、図書館の日本現代文学全集を読み始めました。最初に熱中したのは、武者小路実篤で人間こう生きるべきであるという理想主義思想にのめり込み、多くの作品に触れました。同じ考えの有島武郎の作品にも触れました。理想主義の後には、川端康成、三島由紀夫、芥川龍之介、宮沢賢治、太宰治、水上勉、石川達三などの作品を読んでみました。三島由紀夫の「金閣寺」

と水上勉の「五番町夕霧楼」は、同じ事件を題材としているのに内容が全く異なり、この違いはどこから来るのか、作者の生い立ちの違いから影響されているのか、色々と考えさせられました。石川達三の作品では、普通に生きることの難しさを考えさせられ、「鬼滅の刃」と似たような理不尽を感じました。日本の代表的な小説家の作品を読み、明治、大正、昭和、特に太平洋戦争後、大きく変化していった社会状況や人々の考え方を自分なりに理解することができたような気になりました。

図書館を散策するようになり、専門分野の解説や入門者向けの内容が書かれた新書の存在を知り、講談社

現代新書とブルーバックス、中公新書等で興味がある分野の本を読み、多くの知識を得ることができました。ある時、自分で考え方や頭に浮かぶことが変わってきていることに気づき、講談社現代新書「ノイローゼ」を読み、自分があまりよろしくない状況にあることを理解し、自分の考え方を換え寮生活を続けることができました。現在は、相談室等がありそのような状況には、なりにくいのですが。今でも、この本に助けられたと思っています。

本を読むことが習慣づいた後、「どくどくマンボウ航海記」で知られる北杜夫や、「狐狸庵先生」と呼ばれた遠藤周作、「ムツゴロウ動物王国」の畑正憲らの

陽気なエッセイや小説を楽しみました。3年生の時には、大学受験を考え都会での学生生活に憧れを持ち、柴田翔の「されどわれらが日々」、庄司薫の「赤頭巾ちゃん気をつけて」、「さよなら快傑黒頭巾」、「白鳥の歌なんか聞えない」、「ぼくの大好きな青髭」、三田誠広の「僕って何」等の青春文学に熱中しました。大学へは、卒業後編入学しました。4年生の時には、友人らと三島由紀夫の舞台となった伊勢湾の入口にある神島に鳥羽港からの定期船で渡り、地図

を頼りに山道をさまよひ、やっとの思いで監的哨跡にたどり着き、少しだけ「潮騒」の世界に入れたような気になりました。

今は昔ではないけれど、私が高専生の時代はパソコンもスマホも存在せず、もちろんウィキペディアもなく、必要なことを調べたり、疑問に思うことを解決するためには、本を読むことが一番でした。現在、世の中の環境は全く違っていますが、若くて純粋な皆さん方に、Eブックでも良いので、文字を読み様々なことを感じたり、考えたり、想像したりすることを楽しんでもらいたいと、思っています。



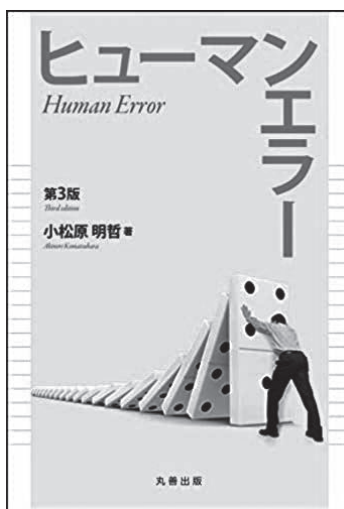
効果的なヒューマンエラー対策

商船学科 片倉 広 暁

今回、学生の皆さんにお薦めしたい本として小松原明哲先生が書いた株式会社丸善出版「ヒューマンエラー」という本です。学生の皆さんは、「ヒューマンエラー」と聞いて何を思い浮かべますか？私はヒューマンエラーと聞くと、うっかりぼんやりというような、悪意のない、凶らずも起こしたようなミスを連想してしまいます。怠慢や手抜きのような、意図的な行為も考えてしまいます。最近では、船舶の事故が発生しており、安全マネジメントやヒューマンエラーを見つめていかなければなりません。事故をなくしたいという願いは、私たちに共通しています。人的要因に起因する事故がなくなることは、船舶の大型化に伴い、ひとたび事故が起こると、一度に多くの人命が失われることになっている今日、海運業界では、人的問題の比重がますます大きくなっています。また、どのような事故であれ、事故はあってはならないものであり、事故の原因を見つけて対策をとっていかなければなりません。この本は、ヒューマンエラーとは何なのか？どうして起こるのか？という本質的なことなど、ヒューマンエラーの内容をわかりやすい言葉で書かれている本になっています。

ヒューマンエラーは、“すべきことを果たしていない”と言われますが、「すべきことが予め明確に

決まっている場合」と「後から振り返ってすべきことを指摘される場合」があります。すべきことは、規則や手順、法律などで明示されていることや常識で暗黙に決まっていることや心に決めたことがあります。実際の現場では両方が求められます。学生の皆さんはどちらの場合に遭遇したことがありますか？私の例として、船舶を避航操船するときを考えてみます。航路の輻輳度や気象条件など、航海情報は時々刻々変



わります。その状況に応じた適切な判断や対応が安全の鍵になります。それがうまくいかないと「あすればよかったのに」と後知恵でエラーといわれてしまいます。私の例は、後者の場合になり、柔軟な対応力が求められます。危険な作業を扱う人ほど、ヒューマンエラーは起きないだろうか、事故にならないだろうか、といことを常に考えていなくてははいけません。私たちの生活や集団行動では、ヒューマンエラー

を起こさないところから始まって、事故や損害を最小限に抑えるところまできちんと考えてはじめて安心できるということになります。日々、ヒューマンエラーや人の不適切な行為、失敗や成功といったことに頭を悩ませている学生の皆さんは、読んでみてはいかがでしょうか。



欠けていることは何も悪くない

一般教科 後藤田 和

今回、学生のみなさんにお薦めしたい本は、シエル・シルヴァスタインという作家の2つの絵本『ぼくを探しに』と『続 ぼくを探しに ビッグ・オーとの出会い』です。「絵本」と聞くと「乳幼児や幼稚園児のための本」と思う方もいるかもしれませんが、侮ることなかれ、この本には高専生の皆さんが今読んで、それから、大人になってから読み返してみても、多くの発見を与えてくれる表現が詰め込まれています。

また、絵本にもカラフルな色彩を使っていたり、ページをめくると飛び出してくる仕掛けがあったり、さまざまな形式のものがありますが、この絵本は白い余白と黒い線のみによって描かれた絵と各ページ多くても6行程度の文とで構成された非常にシンプルな仕上がりとなっています。

一冊目の『ぼくを探しに』では、円に三角の口が空いたパックマンのような図形が主人公で「何が足りない／それでぼくは楽しくない」「足りないかけらを／探しに行く」というつぶやきから物語が始まります。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」のように四季折々を転がっていき、みみずと話したり、花の香りをかいだり、カブトムシを追い越し、追い越されたりしながら、様々な形の「かけら」に出会い、ついに完璧にぴったりの「かけら」をはめこんで、転がりだします。ですが、そうってしまうと、パックマンの状態で転がっていた時のようにみみずと話したり、花の香りをかいだり、カブトムシを追い越し、追い越されたりすることができなくなってしまいます。

そして二冊目の『続 ぼくを探しに ビッグ・オーとの出会い』では、上で置き去りにされた「かけら」が主人公となり、上のパックマンと同じように自分をくわえて運んでくれる口の空いた図形を探していきます。最後には完全な円「ビッグ・オー」と出会い、「かけら」自身が動いてみたらどうかと提案されたことで、「かけら」は転がり始め、角がとれることで円となり自分自身で動き出せるようになっていきます。

ここまで、長々とあらすじを述べてきました。私がこの絵本を読んで、いつも思うことは「完全」、「完璧」などは存在しない、ということです。私自身、これまでの人生でさまざまなことをしてきましたが、そのどれもが「完全」、「完璧」なものなどありませんでした。今もみなさんに「現代文」や「古文」を教える「先生」という立場ですが、自分が「完全」、「完璧」とは思いません（授業を受けている人はよくわかると思います苦笑）。

そうなってくると、みなさんも「完全」、「完璧」に絶対にならなければならない必要はないですし、それこそ今は自分を探している最中だと思います。いろいろな節目でこの絵本を思い出しながら、その時々自分を「欠けていてもいい」と認めてあげながらこれからの学校生活をよりよいものにしてほしいと思います。絵本は私の研究室にあるので、いつでもお貸しします。



物理学を学んだ理工学系学生に勧める一冊

電子制御工学科 西原正継

理学・工学系学生にとって、物理学とは欠くことのできない基礎科目の1つであり、専門科目の多くは物理学を基幹とする。専門科目の知識を習得しようとした際にこの事実に気付き、改めて物理学を自習しようとしても十分に理解することが難しい。本科3年生で物理学を学んだ諸君は「電磁気学」、「流体」、「力学」とその発展した知識を習得することになる。このとき、3次元ユークリッド空間（歪みのない空間）上の高自

由度運動を解析することの難しさを知る。物理学で習った知識は、古典力学の基礎方程式を基にしたデカルト座標（直交直線座標）系による運動の解析法であったが、これを一般の力学系に適用しようとするとは非常に厄介である。その場合に非常に役立つ概念がラグランジュの方程式を基にした運動解析法であり、それを扱った「解析力学」は高自由度運動を解析する上で学んでおいて損はない。ラグランジュの運動方程式は、ベクトルの成分分解や高次連立方程式などに頭を悩ませずに半ば機械的に運動方程式を立式できる特徴をもつため、高自由度運動を解析する上での便利で実用的な処方箋といえる。

今回紹介する書籍は、ラグランジュの運動方程式を基幹に、第1章ではニュートンの運動方程式からラグランジュの運動方程式までの導出、第2章では接触等の拘束条件下での運動の記述法に関する途中の細かな式変形や概念の説明が丁寧に記述されている。また、第3章では運動経路の最適化問題に関する解法（変分

原理）、第4章では方程式そのものの性質調査を基とした汎化法（正準方程式と正準変換）について記されている。このような書籍では、一般論に関する汎化方程式のみを紹介し、実際にどのように適用されるかまでは書かれていないことが常である。しかし、この書籍は第5章において、力学系の運動のうちで非常に普遍的な微小振動を題材に、具体例を用いた実際の運動への適用や応用の仕方まで詳細に記述されている。また、書籍の節々にコーヒー・ブレイクと題した豆知識に近い小ネタ（科学史におけるエピソード）も紹介されており、ここに記述されている内容も非常に面白く、興味深い。

物理学を学んだ学生諸君がもう少し実用的な力学を身に着けるための入門書として、また、物理学の発展した知識を習得するための前段階の知識として、読んで理解しておくべき知識が詰まった一冊である。解析力学を学び始める学生にとって、第3章および第4章の知識は高次元の話であるために少々理解に苦しむと思う。まずは第1章、続いて第2章と読み進めた後に、第5章の具体的な問題について解くことで、解析力学の体系について理解を深めていってほしい。第3章と第4章の知識は古典力学と統計力学や量子力学との橋渡しをする上で重要な役割を果たすため、余力があれば挑戦してほしい。

「物理入門コース2 解析力学」小出昭一郎著

岩波書店





『余命10年』を読んで

商船学科3年 南波夏海

「余命10年」小坂流加 著

私はこの本で、胸に刺さって刺さって、いっそ体に埋めてしまいほど感動したひとに出会った。

「友達だからって無理に全部話さなくてもいいよ。でも、どうしてもダメになったらおいで。彼でも親でも自分でもダメになったらわたしのところにおいで、いい？」

難病を患い、余命10年と宣告されていた主人公茉莉は、どうしても彼氏に病気のことを伝えられずに苦しんでいた。この言葉は、そんなとき電話越しの茉莉の雰囲気を感じた友人が言った温かいひと言だった。余命10年をタイトルにした本だからこそ、私にとっては非日常を生きる主人公の考え方やセリフ、行動に心を動かされるのがセオリーだと思っていた。しかし、このひと言は、余命を宣告されるような経験をしたことがない私の日常でも、考えられたり共感できたりするもので、衝撃を受けた。

私には彼氏に病気のことを伝えられずに悩んでいる友人がいる訳ではなく、それこそ自分自身が余命10年だと医者から伝えられている訳でもないが、ほろほろに傷つきながら悩んでいる友人を目の前にしたことや、自分でも自分のことを支えられなくなったことがある。

あのとき、傷ついていて悩んでいるけれど全てを話そうとはしない友人を目の前にして、私は息が詰まった。その子と私との間には、悩みを打ち明けられるほどの絆は無かったのだろうかとか被害者的思考に陥ったし、その子に何をできるのか、何を言ってあげたら良いのか分からなかったからだ。この言葉からは、自分

の不安な気持ちやもどかしさをきっと抱えながらも、友人である茉莉の立場や気持ちを沢山考えて包み込んでいることが分かり悔しいほど感動した。また、何か伝えたい、支えになりたい思いを臆せずに、伝わる言葉で言えていることを尊敬すると同時に、とても勉強になった。

あのとき、自分の気持ちすら分からなくて、誰にどう話したらいいのかも分からなくてひたすらに崩れていた。自分の毎日を生きていくのは自分しかいないし、自分の気持ちを感じるのも自分しかいない。けれど、自分ではダメで立ちきれないことがあると思う。あのひと言を読んだとき、あのときの締めつけられている気持ちがフラッシュバックするのと、縋るような安堵感と安心感で息が詰まった。また、私が実際に言ってもらえたわけではないけど、自分でもダメになることがあることを、誰かに分かってもらえているようで救われた。

主人公にかけられた友人のひと言は、あのとき、ほろほろの友人にかけてあげたかった言葉でもあるし、あのとき、誰かにかけてもらいたかった言葉でもあったから、刺さって刺さって、いっそ体に埋めてしまいほど感動したのだと思う。

言葉の力は、ずっと大きくて深い。だから、使うことはとても難しい。毎日使うものだけど、たぶん私が言葉を使うことに慣れる日は来ないと思う。誰かのひと言に一喜一憂して、自分の言葉に悩んで誇って、一生一緒に生きていく。





『行書がうまくなる本』を読んで

流通情報工学科1年 上田 奏 榮

「行書がうまくなる本」筒井茂徳 著

この本と出会ったのは、今年の7月。私が独学で書道を始めて約1年が経とうとしていた時である。独学者にとって本を読むという行為は欠かすことの出来ないものであり、それ無くして技能は成り立たないと思う。

本の内容としては、中国の書聖「王羲之」が書いた『蘭亭序』について書かれており、その物の背景、書法、妙技な字を事細かに明示している。

まず、先に書いた『蘭亭序』についての説明をしようと思う。蘭亭序とは、王羲之が永和9年に会稽山の麓の蘭亭に名士や一族を招き曲水の宴を開き、詩を作った際にその詩集の序文の草稿として書かれた物である。王羲之の最高傑作、書道史上最も有名な書作品で、行書を学ぶ上で避けては通れないものだ。

次に、蘭亭序を書き、学ぶ上で留意しておきたいことがある。それは、「王羲之の真筆の一切が残っていない。」ということだ。要するに確かな筆跡が分からないのだ。この本に載っている蘭亭序は『神龍半印本』と呼ばれる本物を双鉤填墨という手法を使い正確に写し取ったものである。

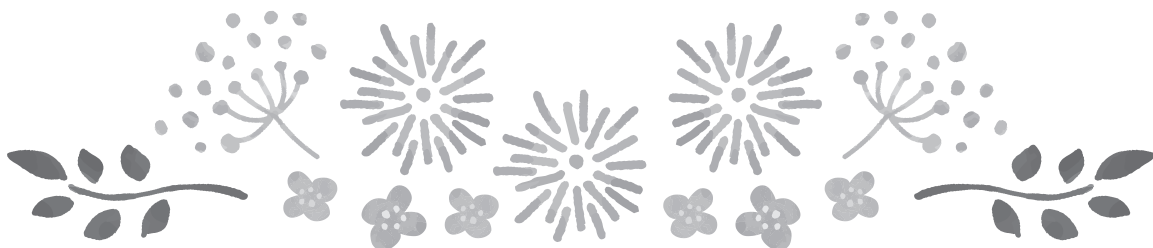
私は独学なりに色々な記事や本を読んだり、SNSでの意見交流を繰り返し行なったりしたが、とある意見を聞いた。それは「王羲之の書を臨書する上で、真筆は無いため正確に臨書する必要はない。」というものだ。確かに、と納得した。真筆がないので、どれだけ正確に臨書しようと王羲之本人に近いかどうか分からないのだ。しかし、この本では筆圧、運筆により生まれる線を大切に、正確なる臨書を勧めている。それを行うことで臨書や行書の技術上達、書を観る目を

養うのが筆者の狙いなのだそうだ。確かに、そっくりに書こうとすると筆先まで神経を使わなければならないのだ。それ故、圧倒的に筆遣いは変化する。

本書は157ページに渡って王羲之の字の特徴、その背景を詳しく説明し、蘭亭序の奥深さを追求している。最大の特徴は、38ページ目から始まる見開き1ページを使っての6文字ずつの説明である。右ページは半紙へ書く時に重要となる文字配置とバランスを分かりやすくした6文字配置のもので、左はその6文字を1字ずつ特徴、背景を含め丁寧に説明したものとなっている。

私は先日、大東文化大学の全国書道展に出す作品として蘭亭序の臨書を選んだが、独学である以上、師はいない。よって手本はないし、最適なバランスもよく分からない。そんな時にこの本は大いに役立った。概形から見る文字のバランスや筆順。特に、「楷書を少し崩して、筆画を所々繋げたような字は行書風味であるだけで行書の真意ではない。」という文には大きく頷けた。事細かに書いてあるお陰で、自分の中では完成度の高い臨書に仕上げることが出来た。また、「かすれやにじみに頼るのはごまかしであり、まじめな臨書にかすれやにじみは必要ないのである。」という文に、かすれを良かれと思いついていた私は感化された。

古来より伝わるコミュニケーションの一つである文字を芸術的観点で見るとは面白いし、興味深い。何故、王羲之は書聖と呼ばれるのか。その天才ぶりが初心者でも飽きないように書かれており、面白く素晴らしいので、書道に興味がある人は是非とも読んで頂きたい。





『星の王子さま』を読んで

流通情報工学科1年 近藤 瑚々

「星の王子さま」 サン＝テグジュペリ 著

この本に初めて出会ったのは小5の時、星の王子さまという題名に惹かれ、私は本を手にとった。だが本を開くと現れたのは大蛇ボアの挿絵だった。

この本の物語は、色々な星を旅してきた王子さまとパイロットの僕の出会いから別れまでが書かれている。この本は読者に大切なものを考えさせる本だ。王子さまや様々な星の話だけでは、きっとただのファンタジー作品になり、ここまでの大ヒットとはならなかっただろう。大人達までも魅了したのは、僕が子供の頃の大蛇ボアの話や王子さまとの別れの時に現れたヘビ、不時着した飛行機などがスパイスとなり、現実味を含んだ独特な世界観が生まれたからだと思う。フィクションのはずなのに、心に語りかけてくるような文章が人を惹きつける。この現象は何度も繰り返す。気づけば私がこの本を読むのはこれで七回目だ。行き詰まった時、人間関係や学校で上手くいかなかった時、私の手は自然とこの本に伸びる。現実から私を本の世界へ連れ出し、そして私は自分自身に問い質す。本当に大切なものは何かと。

こんなにはまったのはあるキャラクターに共感できたからだと思う。私は、王子さまが自分の星で大切に守った一輪のバラに自分を重ねた。このバラはプライドが高く、他のどんなキャラクターよりも人間味があると思う。私も姉にプライドエベレストとあだ名を付けられたことがあるくらい自他共に認めるプライドの高さだ。分かりきった嘘をつき、わがままを言い、誰

かに世話をしてもらいたい。物語に登場する唯一の女性で、彼女の乙女心に多くの女性が共感することだろう。王子さまのような、ぶつかり合いながらも支え合えて愛してくれる男性に守られたいと。しかし男性の立場から考えると、こんな女性はめんどくさいと思うに違いない。それでも自分を貫き通す、弱くて強いバラのことが私は好きだ。

本を何度も読んだ私が出した、大切なものの答えは友達だ。王子さまが地球で出会ったキツネの「大切なことは目に見えない。」と、「君にとってバラが大切になったのは、バラのために時間を費やしたからだ。」という言葉が答えを導く鍵となった。私にとって最も大切なものは友達だ。友達は目に見えんと思いがちだが、友達とは何かを考えた時、私はその人に費やした時間があるからこそ、友達と呼べるのではないかと思う。バラと王子さまの関係を友達などの一言で表すのは難しいが、彼らはお互いになくなくてはならない存在で、それを愛と呼ぶのだろう。私には胸を張って愛している、愛されていると言える友達がいる。少し重いと感じる人もいると思うが、これが私が出した答えだ。時間は有限だけれど、それでも私は躊躇なく友達に使いたい。

大切なものは人それぞれだが、それを愛していると言えるのか、自分の心に聞いてみてほしい。大人のように時間を無駄にする必要はないのだから。



『試着室で思い出したら、本気の恋だと思う。』を読んで

流通情報工学科2年 下川 千歩

「試着室で思い出したら、本気の恋だと思う。」 尾形真理子 著

私がこの本を選んだ理由は、本の題名に惹かれたからです。こう思ったら恋であるという事柄は人それぞれですが、「試着室で思い出したら、本気の恋だと思う。」という題名が、まだ知らない本の内容を魅力的に思わせてくれました。

この本では、closet という路地裏にあるセレクトショップで、不思議な魅力をもつオーナーと恋に悩む

女性たちが、一緒に運命を変える一着を探すうちに、心に秘める素直な気持ちと向き合います。恋する女性たちの大切な人を思う気持ちや、一歩踏み出すための勇気を読み手にも感じさせてくれる言葉が沢山あります。恋を通して、これから生きていく上で大切な考え方や、気持ちの持ち方を教えてくれます。

この本からもらった勇気の出る言葉の中で、特に印

象に残った言葉を三つ紹介しようと思います。一つ目の言葉は「コンプレックスだった自分の手を好きだという人がいる。それなら自分の指をもっと可愛く見せたい。」です。この話の女性は、白くふっくらとした自分の手を、幼い頃からコンプレックスに思っていました。そんな彼女は、かわいい手と好きな人に褒められて、初めて男の人と手をつなぎたいと思いました。そんな魔法のような瞬間から、コンプレックスをチャームポイントに変えられるかもしれない、とネイリストになりました。言った側が特別意識せずに言ったことでも傷つけてしまうことがある。その逆で、コンプレックスでなくなるくらい前向きな気持ちになることもある。もし自分がその立場なら相手の心が軽くなるような言葉がいい。言葉の大切さがよく分かりました。

二つ目の言葉は「感情は、年を取らないのかもしれない。対処の仕方がおとなになっていくだけで。」です。この話の女性は、同じ部署で働く年下の男性に思いを寄せています。以前、婚約破棄を経験した彼女ですが、彼の人懐っこさやどんな些細なことにもお礼を言ってくれる真摯さに胸を打たれます。そんな中、彼に急な

赴任が決まり、彼女は婚約破棄されたとき以上の哀しみを感じました。恋愛に限らず、どんなに大人になっても喜怒哀楽に大人も子供もないのだと改めて思いました。どんな時も自分の気持ちと向き合っ、後悔のない生き方をしたいと思いました。

三つ目の言葉は「人と違うのが個性ではなく、自分らしいのが個性なんだ。」「正しいことは、退屈だけじゃない。誰かに嫉妬して、必死に真似してもちっともかわいくなかなかねない。」です。この話の女性は、日本を代表する若手写真家と同棲中で、結婚したら、彼の右腕のような存在になりたいと思っていました。彼につり合うように個性的なデザインの服を探しますが、服を試着中に彼を好きだという自分の純粋な気持ちに気付き、心が軽くなります。人の数だけ価値観があり、その中で自分という軸をもっている事はそれだけで誇らしいことなのだと思います。人と協調することは生きていく上で大切だけれど、自分らしく生きることにはそれ以上に大切だということが分かりました。

心を落ち着かせたいときや勇気が欲しいときにもう一度読み返したくなる本です。



『コーヒーが冷めないうちに』を読んで

電子制御工学科3年 古坂優衣

『コーヒーが冷めないうちに』川口俊和 著

もし、過去や未来に行けたら。誰もが1度は考えた事があるのではないだろうか。あの失敗をやり直したい、あの出来事をなかったことにしたい。この出来事が起こることを前もって知っていたら。過去や未来に行けたら、現実を変えることが出来ると私はこの物語を読むまでその先入観に囚われていた。

この物語は「過去に戻れる喫茶店」と不思議な噂のある喫茶店フニクリフニクラを舞台に話が展開していく。この喫茶店は過去や未来に行くことが出来るが、ルールが厳しく面倒くさいのが1番の特徴であると思う。過去や未来に行けても現実是不変。喫茶店フニクリフニクラを訪れたことがある人のみ。決まった椅子に座らなければならない。その席から移動することは出来ない。戻れる時間はコーヒーが冷めるまで。この5つのルールが存在する。そのルールを見て私はとても驚いた。過去や未来に行きたい人は何かしら現

実を変えたいのに変えられないなんて行く意味はないのではないか。制限時間は曖昧で場所も指定されているなんて条件が厳しいのではないか。しかし、それと同時に興味も湧いた。このルールを知ってなお物語に登場する人々はどのように考え、行動するのか知りたかった。

私が、この物語を読んで特に印象に残った話は4章の「親子」という話だ。母親の計と娘のミキとの関係が丁寧に描かれており、共感できる内容や言葉に思わず涙ぐんでしまう程印象深い話だ。計は生まれつき心臓が弱く、お腹の中にあるミキを産んだら自分の命は危うい状況にいた。それでも、産む決心をした計の決断力と強い意志を私はとても尊敬した。私だったら覚悟が決まらず、ずっと悩むと思う。

この章では、他の章とは違って過去に戻らずに未来に行くのだが、未来で会いたい人が喫茶店を訪れてい

るか分からない状況で未来に行こうと考えた計はとて
も挑戦的な人だなと思った。計の性格が鮮明に現れて
おり、計の人間性にとて惹かれた。この章の中で登
場する「幸せに生きるための才能」という言葉が私は
忘れられない。他の人から見た計という人物を表した
言葉だ。困難や辛いことがあっても自分の決めた道
を楽しく生き抜く計にとてぴったりの言葉だと思っ
た。私はこの言葉は計にだけ当てはまる言葉だと初め
は思っていたけれど、物語を読んでいくうちに、ミキ
や私のような読者にも当てはまる言葉なのではないか
と考えた。人は「幸せに生きるための才能」を皆持っ
ているとこの章では伝えたいのではないかと思っ
た。未来に行くまで、計はミキの傍で成長を見守ることが
出来ないことを申し訳なく思っていたけれど、ミキは
この世に生まれたことに感謝していると計に伝えている
描写を見て、この瞬間に計は本当の意味で母親にな
れたんだなと思った。ミキも計も素直に言葉を伝えら
れ、幸せそうな様子が伝わってきて親子の素晴らしさ

をこの物語を通して感じる事ができた。

私はこの物語を通して、人はいかにすれ違いが多い
のかということ改めて考えさせられた。言葉にして
伝えることは勇気がいるし、簡単に出来ることではな
いと思う。でも、言葉にして伝えずに後悔するより伝
えた方がきっと後悔は少なくなるだろう。この物語は
過去や未来に行っても現実是不変変わらない。それでも、
過去や未来に戻ることで心が変化した。心が前向きに
なれば人は辛いことも乗り越えていけるのだとこの物
語は伝えてくれた。私は、最初現実が変わらないのな
ら過去や未来に行くのは意味がないと思っていたけれ
ど、それ以上に幸せに生きていくための心が得られる
なら、きっと現実が変わること以上に大事な意味があ
るのだと思っ
た。私はこれからの人生で後悔しないた
めにも、まずは言葉にして伝えることを大切にしたい。
また、失敗や辛い過去から目を背けるのではなく、そ
の経験を生かして前へ進んでいきたい。失敗を経験し
たからこそ今の自分があることを忘れずに。

第23回校内作文・表現コンクール 投票結果

最優秀賞			
『余命10年』を読んで	商 船 学 科	3年	南波夏海
優秀賞			
『行書がうまくなる本』を読んで	流通情報工学科	1年	上田奏榮
『星の王子さま』を読んで	流通情報工学科	1年	近藤瑚々
『試着室で思い出したら、本気の恋だと思う』を読んで	流通情報工学科	2年	下川千歩
『コーヒーが冷めないうちに』を読んで	電子制御工学科	3年	古坂優衣
特別賞			
『海洋大異変』を読んで	流通情報工学科	1年	室岡 陸
『最後だとわかっていたなら』を読んで	流通情報工学科	2年	鎌田祐華
『付き添うひと』を読んで	電子制御工学科	2年	小椋渚生
『走れメロス』を読んで	流通情報工学科	3年	赤田桜優
『スマホ脳』を読んで	流通情報工学科	3年	花岡 彩
『傘のさし方がわからない』を読んで	流通情報工学科	3年	山根優花
佳作			
『同志少女よ、敵を撃て』を読んで	流通情報工学科	1年	岡本真奈
『その扉をたたく音』を読んで	商 船 学 科	2年	佐伯紅梨
『バナナの魅力を100文字で伝えてください 誰でも身につく36の伝わる法則』を読んで	商 船 学 科	2年	大下真博
入選			
『弱さを抱きしめて生きていく』を読んで	商 船 学 科	3年	玉置洪晟
『花束みたいな恋をした』を読んで	流通情報工学科	2年	寄能純翔



◆◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆◆

🌸 今号には、新任の先生をはじめ、4名の先生方から、おすすめの書籍や、読書に関する寄稿をいただきました。ご多忙な中、誠にありがとうございました。

🌸 第23回 校内作文・表現コンクールの結果と受賞作品を掲載しました。厳正な審査の結果、最優秀賞に1作品、優秀賞に4作品が輝きました。入賞されたみなさん、おめでとうございます。また、作品審査や運営でご協力いただいた教職員各位に御礼申し上げます。

🌸 お気づきでしょうか？表紙のカットの鳥は『梟』です。知性や学問の象徴として、図書館や出版社のロゴに使われることも多いですが、また「幸運の鳥」とも言われる縁起のよい鳥です。春を迎え、新しい生活、スタートを切る皆さまに、この図書館だよりと共に幸運が訪れますように。



◆文献検索ガイダンス（2022年7月5日）

ラーニング・コモンズにおいて、JDreamIII、ScienceDirectの使い方など、情報検索のガイダンスを実施しました。（講師：電子制御工学科 浜崎淳先生）

◇編集発行：図書委員会（令和4年度）：風呂本武典（図書館長・流通情報工学科）・朝倉和（一般教科）・加藤由幹（商船学科）・吉田哲哉（電子制御工学科）・田上敦士（流通情報工学科）

◇〒725-0231 広島県豊田郡大崎上島町東野4272-1/TEL：0846-67-3007

◇ホームページ：https://www.hiroshima-cmt.ac.jp/facility/lib.html

